私はカタカナが苦手である。カタカナは外来語が多いので、実際の発音と文字表記が違うことが多々ある。しかし私は出来る限り発音通りに書きたい。しかし表記の統合規制や慣習が壁である。特に人名は難しい。近年はベートーベンという表記が廃れつつあるので、ベートーヴェンと堂々と書けるが、未だに悩むのはシェークスピアと統一表記することが決められているシェイクスピアである。発音上「シェイク＋スピア」なので、何故「シェーク」なのかがよく分からない。例えばフランス語ならば、太陽は「ソレイユ」ではなく「ソレーユ」だが、シェイクスピアはイギリス人ではなかったかしら、と思う。一緒にすると怒られるかもしれないが、アメリカのマクドナルドの商品は日本で「マックシェイク」と表記してある。しかし実際には「シェーク」と発音して注文する人が多いように思うので、シェークスピアも同じ感覚なのかもしれない。このようなカタカナ表記は「ー」の音の長さの解釈と、小さい文字で表記する促音の強弱が曲者なのである。そんな例をいくつか挙げてみよう。

あるとき、日本人女性と結婚したアメリカ人男性の戸籍謄本を見せてもらったことがあった。名前は Tom だが、振り仮名はカタカナで「トーム」と書いてある。その人は「トムじゃない！」「と〜む」と幾度か発音してくれたが、英語を含めた西洋語には長音はないので、伸ばす音は当然のように日本語の半分くらいであった。

またイタリアのブランドの Furla を「フルラ」と言ったら、あるブランド好きの若い日本人女性に「フルーラ」としつこく訂正された。細かくいえば「フルラ」が正解だと思う。この長音の意味は未だによく分からない。

こんなことを書いているのは、実はつい先ごろまた驚いたことがあったからだ。「チャールダーシュ」という曲の演奏を聴いてきた翌日、家で何気なくクラシック音楽のチラシの塊に目を通していた時のことである。私はドッサリ・バッサリよこされるチラシは熟読しない。まず出演者の顔を見る。「この人の演奏なら」と思うのが第一段階である。次に曲目の中に好きな曲があるとそこへ目がいく。従って見慣れない表記は自然と読み飛ばしている。それがこのときはゆったりと一つ一つ目で追っていて、ふと「チャルダッシュ」という文字が目に留まり、作曲者に目を移した。「作曲者はモンティ…ということは同じ曲？」ハンガリー語で「チャールダーッシュ」ここも「ー」の長さが微妙である。確かに途中でダッシュしているような曲想だが、ここは何とかならないものか。日本語に半長音の記号はないのか。音を縮めすぎると平たくなりすぎて情緒がなくなるような気がする。そして更にもっと凄いことを思い出した。「ウフィツィ美術館展」である。その文字にはかなりの抵抗を感じ、感想を書く時ウフィッツィと表記したかったが、勝手に展覧会名を変えるわけにはいかないので辛かった。

そして何故こんな表記になるのかといえば、日本語で長音と促音を表記通りに正しく発音しようと思えば、長音は長すぎて、促音は強調しすぎるからではないかと思う。発音が違うと通じない。だからカタカナ表記は、日本語の平らな発音と日本人の口に合わせた造成外来語といえるかもしれない。しかし必ずしも全て長音表記が省かれているわけではない。スポーツは「スポツ」とは書かないし、スイーツは「スイツ」とは書かない。そして「コーヒー」はそのまま発音して通じるとは思えない。明治時代に英文学を修めた夏目漱石の「コフィー」のほうに賛同したい私である。(2014.12.6)